

つなげたい！ 英語活動にかかわる人たちの想い

墨田区立第二寺島小学校 杉浦 栄美

1 私と小学校の英語とのつながり

「すごく英語が得意！」だったわけではない。高校生の時には、ほぼ英語の勉強をしていない。けれども、大学3年の時、「これからは、やっぱり英語ができないとね。」と、夏休みの1か月間、アメリカのロサンゼルス近郊にホームステイした。それから大学卒業後、6年ほど民間企業に勤め、貯めたお金で1年間英語を勉強すれば話せるようになる信じて会社を辞めた。半年間全日制の英会話学校に通い、そのつながりでアメリカのテネシー州の中学校にインターンとして日本文化を紹介する授業を担当したが、ペラペラに話せる日なんて来なかった。ある日、中学校の校長であるホストマザーと夕食をともにしている時、「日本人は、箸でどうやってステーキを食べるの？」と質問された。切られていないステーキと箸について考えたこともなかったのも、言葉に詰まった。すると、「やっぱりナイフとフォークじゃないと切れないわよね。」と鼻で笑われた。本当に腹が立った。でもその後、周囲と親しくなるにつれ、質問される機会が増えた。「なぜ、日本人は醤油を使うの？」とか「私はこのOneidaの町が大好きだけど、Emiの町はどれくらいの大きさなの？」しかし、それらに全く答えられなかった。私自身が自分の国や自分の町に誇りをもっていなくて、人に説明できるほどの知識になっていなかったからだ。恥ずかしかった。特に、中学生のキラキラした瞳が、答えられない私を見て失望の色に変わる時…

日本で過酷な高校受験のまえに、義務教育である小・中学校の6年間で少なくとも2回、自国の地理や歴史について徹底して覚えてきたはずである。「これではいけない！英語を使えるようになるためには、まず小学校から自国の文化についてしっかりと意識して学習しなければならない。このことを子ど

もたちに伝えなければ。」その想いが、私が小学校の教員になる決意となった。そして、教員試験の模擬授業として作成した指導案は、英語を使って『箸・Chopsticks』のよさを伝える内容になった。この指導案は今現在も使い続けている私の宝物である。



▲実際に授業で使った道具

2 小学校英語の授業づくりとのつながり

2020年の外国語活動、完全教科化へ向けて動き出している変化は、激動に近い。それでも、確実に目標に向かって前向きな小学校の教員は多く、さらに授業もおもしろい。

それはなぜだろう？そこには、総合的な学習の時間の授業づくりを乗り越えてきた教員の底力が大きく関係している。総合的な学習の時間と外国語活動の目標や指導計画の作成には酷似する点がある。まず一つめは、「協同的に取り組む態度」（総合的な学習の時間。以下〔総〕）と「コミュニケーションを図ろうとする態度」（外国語活動。以下〔外〕）である。このそれぞれの目標を通じて、子どもたちの課題点がコミュニケーション能力にあることをしっかりと意識することができた。次に、「横断的な学習」（〔総〕）と「国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で児童が学習したことを活用する」（〔外〕）である。視野を広げるために、教科にとらわれない考え方が大切だということを認識することができた。どちらも苦しかった授業づくりではあるが、総合的な学習の時間で英語以外の指導案を作

り続けた教員は、何もないところから、各教科を取り入れておもしろい授業をつくるのが体に染みついてしまったわけである。

3 想いのつながり

苦勞し、熱い想いをもった教員の方々が、テキストを作っている。私が働いている墨田区では、スカイツリーが完成する前の、今から5年前に、各自治体に任されている学びの活用として、『SUMIDA ENGLISH 1・2』を完成させている。指導書もCD-ROMもついていて、1は5年生に、2は6年生に配布されている。5・6年の授業時数が年間35時間から50時間まで増やせるようにと作られていて、充実度は高い。提示されているフレーズが一方通行にならないように、相手の気持ちを聞き返せる工夫がなされている。また、外国人観光客の増加を見込み、自分たちの町をきちんと伝えられるようにとの想いも詰まっている。例えば『英語ノート』に始まり、『Hi, friends! 1・2』に至っても例外ではないであろう。

最近、「inputとoutput」という言葉をよく目にするが、指導方法を巡っての意見も熱い。私が目にしてきた意見の中で感じたことを記しておく。

☆input…英語を手段として『聞く』ことを中心とした活動

○聞かせる内容を創意工夫しないと通じないので、授業づくりの力がつく。

×何をもって「聞けた」なのかがわかりづらく、評価しづらい。

☆output…授業時間内に『発話する』ということを大切に活動

○英語を発話するので、話しているように見えるし、子どもたちの「言えた」という満足度は高い。

×何をもって「話せる」につながる活動なのか、リズムなのか、量なのかがわかりづらい。

「思ったことを英語で話せない。」と感じている人は多いが、話す勇気がないからなのか、話しかけられて内容を聞き取れないから

なのか、答えられる素地が育っていないからなのか。お互いを否定せず、よいところを認めるという姿勢を試されているのは、実は大人の方なのではないだろうか。

4 捨てる指導案なんてない！

「英語を話せるようになりたい！」という子どもたちの想いをずっと持ち続けてもらうために、次の項目をチェックし、足りていない部分だけ変更してほしい。

- ☐ ①子どもたちが、自分の想いを表現できる場があるか？
- ☐ ②子どもたちが自分の頭で考えて、納得できたり、初めて知った文化の違いに驚いたりする場があるか？
- ☐ ③活動に入る指示が英語表現でなされている場があるか？
- ☐ ④単元中に、一人の人間としてのALTの姿が盛り込まれている場があるか？



▲ ALTの出身国を知るためのクイズ

5 おわりに

数年前、月一回開かれる小・中学校の英語を担当する教員の出張会議で、涙が出そうになったことがある。それは最後の回だからこそ、中学校の教員が小学校の教員に向けて熱く語ったメッセージである。

「英語が得意じゃなくていい。発音が下手でもいい。技術的なことは、中学校に入ってから私たちがしっかりと教えるから、とにかく、どんなことにもすぐにあきらめない子を送り出してほしい。」と。信じませんか。子どもたちの幸せを願う気持ちに変わりがないことを。